更級日記（冒頭部分）

菅原孝標女

東路の道の果てよりも、なほ奥つ方に生ひ出でたる人、いかばかりかはあやしかりけむを、いかに思ひ始めけることにか、世の中に物語といふもののあんなるを、いかで見ばやと思ひつつ、つれづれなる昼間、宵居などに、姉、継母などやうの人々の、その物語、かの物語、光源氏のあるやうなど、ところどころ語るを聞くに、いとどゆかしさまされど、わが思ふままに、そらにいかでかおぼえ語らむ。いみじく心もとなきまに、等身に薬師仏を造りて、手洗ひなどして、人まにみそかに入りつつ、「京に疾く上げ給ひて、物語の多く候ふなる、ある限り見せ給へ。」と、身を捨てて額をつき、祈り申すほどに、十三になる年、上らむとて、九月三日門出して、いまたちといふ所に移る。

年ごろ遊びなれつる所を、あらはにこほち散らして、たち騒ぎて、日の入りぎはの、いとすごく霧りわたりたるに、車に乗るとてうち見やりたれば、人まには参りつつ額をつきし薬師仏の立ち給へるを、見捨て奉る悲しくて、人知れずうち泣かれぬ。

◎口語訳

「東海道の道の果て」といわれる常陸の国よりも、もっと奥のほうにあたる上総の国で育った人(である私)は、どんなにか田舎びていたであろうに、いったいどういうわけで思い始めたのであろうか、世の中に物語というものがあるそうだが、それを、どうにかして見たいものだと思いながら、手持ちぶたさな昼間や、夜の語らいの折に、姉、継母などといった人々が、その物語、あの物語、光源氏の様子などを、ところどころ語るのを聞くと、ますます(物語を)見たいという思いが募るのだが、私が思うとおりに、(姉や継母が物語の一部始終を)そらんじていて思い出しつつ語ってくれようか、いや、語ってはくれない。ひどくじれったいので、等身大に薬師仏を造り、手を洗い清めたりなどして、人のいない間にこっそりと(仏間に)入っては、「京に一刻も早く上らせてくださって、物語がたくさんあると聞いております、その物語をありったけ全部私にお見せくださいませ。」と、身を投げ出し額を床に付けて、お祈り申しあげるうちに、十三歳になる年、上京しようといって、九月三日に仮の出発をして、「いまたち」という所に移る。

長年遊び慣れた家を、外から丸見えになるほど(家具や調度類を)乱雑に取りはずして、(人々は、その荷造りに)大忙しで立ち働き、(やがて)日が沈みかかる頃で、辺り一面に恐ろしいほどひどく霧が立ち込めてくる頃に、車に乗ろうとして(わが家の方を)ふとふり返って眺めたところ、人のいない間にお参りをしては額をついてお祈りしていた薬師仏が立っていらっしゃる、その仏様をお見捨て申しあげて旅立つことが悲しくて、人知れずつい涙がこぼれてしまった。